古墳と埴輪の誕生と滅亡
～東アジアとの深い関係～

太田市立太田中学校　　２年B組　　楊　子龍

１．テーマ設定の動機

ほとんどの昔にあったものが、今は残ってないことが多いと感じる。埴輪や古墳は古墳時代にあったと言われている。しかし、今は埴輪や古墳を作ることはないだろう。つまり、古墳時代から今に至るまでのどこかで、滅亡したということだ。また、埴輪や古墳はなにかのきっかけで誕生したと思われる。今回は埴輪や古墳が生まれてから、消えるまでの過程を研究したいと考える。

２．研究

２-A　埴輪や古墳が栄えた時代

埴輪や古墳は今から約1600年前ほどに誕生したと考えられる。そして栄えた3世紀から7世紀頃の時代を古墳時代と呼ぶ。また、古墳時代の中でも多く時代を区分することができる。出現期古墳、前期古墳、中期古墳、後期古墳、終末期古墳に分けることもできる。時代が進むにつれて古墳の数は増えていく。古墳時代の中でも、時代が移り変わるにつれて古墳の様子にどのような変化があるのだろうか。

２-B　古墳時代の時代区分

古墳時代の中にも時代を細かく区分することができ、時代ごとに古墳の形も少しずつ変わってくる。

２-B－a　古墳時代前期

４世紀の初期にあたる。墳丘の形は前方後円墳である。前期の特徴は前方後円墳が多いこと。前方部よりも後円部のほうが高い位置にある。

２-B－b　古墳時代中期

４世紀後半から５世紀前半にあたる。前期と比べ、古墳が大型化している。大きさは全長２００mに達するものが多い。中期は前方後円墳が更に増えている。

２-B－c　古墳時代後期

時代は６世紀にあたる。前期、中期に比べ大きさがまた小型化している。全長１００mほどのものが多い。前方後円墳より徐々に円墳が増えつつあるが、まだ前方後円墳のほうが数は多い。１番多く古墳が作られた時代だと考えられている。前期と前方後円墳の形が変わり、後円部よりも前方部のほうが高い位置になった。

２-B－d　古墳時代終末期

時代は７世紀に当たる。大きさは後期よりも小型化し、１００mには満たない大きさになった。その分、狭い場所に密集して作ることから、群集墳と呼ばれるようになった。この時代になると、前方後円墳は作られなくなり、すべて円墳と方墳になった。

２-C　上野三碑から学ぶ

はじめに上野国（こうづけのくに）は群馬県の旧国名である。そこに残された３つの石碑を上野三碑という。

昔、群馬は東アジアとの関係が深かったという。その東アジアとの関係をこの３つの石碑がが表している。石碑を作っている原料としては自然石を利用しているものが多い。また、もともと日本では石碑を建てる技術が発展しておらず、中国より朝鮮半島の影響を多く受けていることが考えられる。

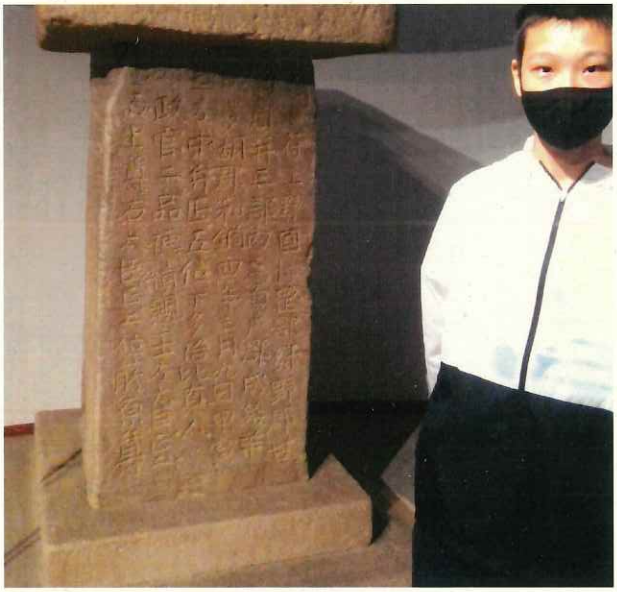
２-C-a　山上碑の研究（右写真参考）

山上碑は６８１年に建立されたと考えられており、上野三碑の中で最も早く建立されたものだ。また、日本最古でもある。石碑には日本の語順で漢字が示されている。つまり全て漢字で書かれていても、日本語の語順で読むことができるのだ。現在につながる日本独自の漢字の使用法が確認できる貴重な史料だ。

内容：　飛鳥時代、放光寺の僧が母の供養のために石碑を建てた。

石材を輝石安山岩を利用している。特徴が朝鮮半島の新羅の石碑と類似していることからも朝鮮半島の影響を多く受けているとわかる。

２-C-b 多胡碑の研究（右写真参考）



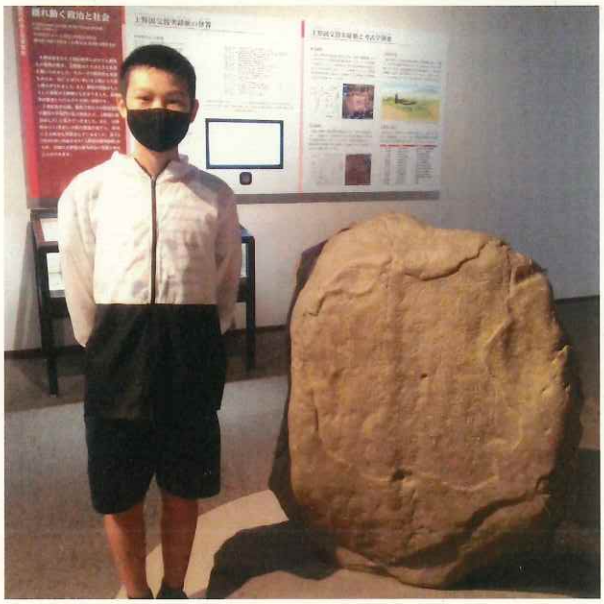
上野三碑のうち、２番めに作られた石碑で７１１年に建立された。また上野三碑の中で一番大きい。奈良時代、多胡郡が新設されたことを記念し、伝える石碑である。石碑に刻まれた字は、現在でも日本や中国で「書」の手本にされている。石碑の文字は当時最先端の中国文化の影響を受けていることもわかる。胡は渡来人のことを指し、多胡郡は渡来人が多く住んでいたところのことである。

石材は牛伏砂岩という花崗岩質砂岩を利用している。　石碑の形としては笠石・碑身・台石で構成されている。方形の笠のような形で下部がへこんでいる。また方柱状で上部に細いホゾがあり、この上に笠石がのっている。

2-C-c　金井沢碑の研究（右写真参考）

上野三碑のうち、最後の７２６年に建立されたものである。大きさは山上碑と同じくらいである。他の石碑に比べ丸みを帯びているのが特徴的だ。建立されたのは奈良時代であり、一族が仏教の教えで結束することを誓った石碑である。また碑文に出てくる「群馬」の文字が群馬県内で使われた最古の例としても知られている。このようにこの石碑からは東国文化での仏教の広がりについてわかる。

建材は硬質の輝石、また安山岩の自然石を利用している。



資料：３つの石碑の比較（左写真参考）

３つの石碑の位置関係　（右資料参考）

上野三碑からわかったこと

３碑の記録形態は上野国に住み着いた朝鮮半島からの渡来人がもたらしたものである。また、石碑を読み解いて行く上で、東アジアの交流があったことは確実である。このことから、古墳・埴輪の誕生滅亡に東アジアの国々が関わってくることは間違いないだろう。実際に東アジアの国々は日本にどんな影響を与えたか次章で考えたい。

２-D　東アジアとの交流を探る

東アジアとの交流をぐる上では綿貫観音山古墳を訪れることで新しい発見があった。

２-D-a 綿貫観音山古墳から学ぶ

綿貫観音山古墳ができた当時、日本は倭と呼ばれ、ちょうどヤマト王権が栄えていたときだった。ヤマト王権は積極的に外交をおし進めていた。このことから日本に東アジアの文化が入ってきたのは、ヤマト王権が関係していたことがわかる。

綿貫観音山古墳には横穴式石室がある。まず石室とは古墳の墳丘の中に作られた石造りの埋葬施設のことである。石室には王が葬られると同時に副葬品も一緒に収められる。

２-D-b 綿貫観音山古墳から学ぶ（石室内の副葬品）

（綿貫観音山古墳と石室　下写真参考）

綿貫観音山古墳には横穴式石室というものがある。横穴式石室ははじめに中国の漢で発達した後、朝鮮半島を経て、日本に伝わった形である。この石室の形が作られたのは古墳時代後期である。

綿貫観音山古墳野跡室内の副葬品は極めて豪華なものが多かったことから、後世の盗掘等に全く遭遇しなかったことがわかる。そして昔の形に近い状態で発見されたので貴重なのだ。

副葬品の１つとして、銅水瓶（どうすいびょう）がある。（別名　王子形水瓶）高さはおよそ３０cmほどである。液体を入れるものであり、蓋もある。また、日本にある銅水瓶の中で最古であり、唯一の完形品である。古代インドから伝わっており、中国を通して日本に伝わった。その証拠に中国北部の貴族の墓に同じような銅水瓶が出土している。

また古代インドから伝わったせいか、同時に仏教も伝わったそうだ。

（銅水瓶　右写真参考）

副葬品の２つ目として、突起付冑（とっきつきかぶと）がある。突起含めると高さはおよそ２９cmある。これは朝鮮半島の伽耶地域から伝わったとされ、証拠に朝鮮半島に同じような突起付冑が出土している。このことから突起付冑は朝鮮半島が起源であると考えられる。日本では同じような冑が４つ出土している。また、甲冑を身に着けた人物埴輪も出土している。

（突起付冑　右写真参考）

副葬品の３つ目として、須恵器がある。遺骸を安置している部分から桃の種が見つかったことから、須恵器には被葬者へ飲食物を供えていたと考えられている。また日本の文化に当時被葬者に飲食物を供える文化はなかった。そして飲食物を供える儀礼は中国や朝鮮半島の思想に由来しているのだ。このことを証拠に須恵器は中国、朝鮮半島を通って日本に伝わったことがわかる。

（須恵器　右写真参考）

（綿貫観音山古墳　石室　右写真参考）

2-D-c 綿貫観音山古墳から学ぶ　（埴輪の樹立の意味）

綿貫観音山古墳からも多くの埴輪が出土している。そして注目すべきところは埴輪が集中して石室付近に多いことである。石室入口付近には向かい合って椅子に座る男女像、三人童女や複数の女子・武人立像が連なり、有意の空間を構成する中核的一群がある。更に馬形埴輪列が馬子を伴って並んでいる。

これらのことから埴輪が置かれる意味が推測できる。それは埋葬された被葬者を中心とした王の世界を様々な形で表すものであったのだ。

綿貫観音山古墳からわかったこと

上のように石室から出土した副葬品３つを研究した。そして３つに共通することを発見した。それはやはり日本の文化は東アジアの影響を大きく受けていること。特にインド、中国、朝鮮半島から様々な文化が伝わってきたことが副葬品から証明できた。それでは東アジアからの影響が埴輪、古墳の誕生、滅亡にどのように関係してくるか次章で考えていきたい。

2-E　古墳・埴輪の誕生

古墳・埴輪の誕生について何がきっかけだったのか考える。

2-E-a　王や豪族の誕生　（弥生時代）

古墳、埴輪の誕生は弥生時代に大きく関係してくる。弥生時代では、卑弥呼のような小さな国の王や豪族ができた。当時では墓に葬られることがとても名誉なことであった。この弥生時代から始まった「墓」というものが次第に大型化し、古墳になったのである。

つまりもとをたどれば、古墳や埴輪の誕生は弥生時代からの王や豪族の誕生に伴ってできたということだ。王や豪族の誕生に伴いはじめは墓ができて、それが古墳になったということだ。埴輪は古墳ができたあと、王や豪族の権力が大きくなることで次第に配置されるようになっていったと考えられる。

2-F　埴輪・古墳の滅亡

埴輪、古墳の滅亡について東アジアの国々と関係づけて考えていきたい。

2-F-a　寺院の建立　（飛鳥時代）

埴輪、古墳の滅亡は飛鳥時代にも大きく関係してくる。そして飛鳥時代の寺院の建立を原因に古墳と埴輪は滅亡したと考えられる。古墳時代が終わると、飛鳥時代になる。飛鳥時代といえば飛鳥文化であり、飛鳥文化は日本初の仏教文化である。そして法隆寺の建立などが行われた。前章で銅水瓶を研究したときにわかったことの一つとして、インドから仏教文化も同時に伝わってきたことだ。なぜ寺院の建立が埴輪、古墳の滅亡と関係しているのか。それは徐々に考え方が仏教に影響され始めたからだ。古墳時代、古墳や埴輪の意味は王を埋葬し、埴輪や古墳の大きさで王の権力を表していた。しかし、飛鳥時代になると王は寺院に祀られ、神様として信仰し、考えるようになった。つまり、徐々に価値が変わってきてしまったということだ。つまり古墳や埴輪の代わりが寺院になったということだ。

中世になると、古墳は新しい都の運営に伴い壊されたり、あるいは副葬品の盗掘が始まってしまい、古墳時代とは考え方が全く変わっていくのだ。
明治時代になると古墳というものが再び認識されるようになったが、近世社会でも、畑を作ったりするために古墳は次々に破壊されていく。このように古墳、埴輪は段々と滅亡していったのだ。
だからこそ、今に残る古墳や埴輪は貴重であるのだ。

2-G　古墳・埴輪が再び誕生　（近世）

正確には飛鳥時代から古墳や埴輪に対する考え方が変わり一部が壊されただけで、完全に滅亡したわけではなかった。
明治時代、幕末からの尊王思想の高まりは陵墓という古墳の存在を再び社会的に認知させていく。時代が明治になると陵墓調査が盛んになり、陵墓調査をもとに段々と古墳の情報もまた得られるようになった。古墳の中の副葬品も盗掘するのではなく、国が買い上げる制度が確立していくのだ。このように明治時代になると、社会的な古墳に対する制度の変化は、地域住民にとっての古墳への価値観にも良い影響がでたのだ。
しかし、やはり明治になると明治維新も起こり、富国強兵に向けて日本は進んだ。そうすると土地不足はやはり起きてしまうのだ。工場を立てようとしたり、畑を作ろうとしたりするとどうしても古墳は大きな面積を取るので壊してしまう。こうして一時的に滅亡を免れたと思ったが、古墳や埴輪を現代まで残すという事は非常に難しいことであったのだ。

3．結論　まとめ

古墳、埴輪の誕生は弥生時代の王や豪族の誕生がきっかけである。古墳というものは弥生時代にあった「墓」というものが大型化したもので、墓と同じ王や豪族を葬る役割を持つ。

古墳、埴輪の滅亡は飛鳥時代の寺院の建立がきっかけである。東アジアとの交流により、仏教が日本に伝わり、飛鳥文化で寺院が発達した。そして寺院の建立、仏教の伝来をきっかけとして古墳や埴輪の価値観が変わり、最終的に古墳の代わりが寺院になって滅亡した。

古墳、埴輪の滅亡に上記の通り東アジアとの関係は深かった。東アジアとの交流を証拠付ける上野三碑や席室内の副葬品も結論を理由付ける大切な情報があった。

4．研究を通した感想

今回、はじめに疑問を持った、急な古墳、埴輪の誕生と滅亡。研究していて、情報から昔の群馬県の様子を考えることはとても興味深かった。発見した情報をどのように結論につなげるか、また１つの情報からなるべく多くの追加情報を見出すかが結論を出す上でとても大切だと感じた。

今回の研究をする上で疑問に思ったこともいくつかある。一つはヤマト王権の存在である。ヤマト王権はもともとどのようにして作られたのか。もしかしたら、ヤマト王権の誕生と滅亡にもなにか東アジアとの交流があったのかもしれない。そもそもヤマト王権が東アジアとの交流を積極的に進めたのだとしたら、古墳、埴輪の誕生、滅亡はヤマト王権と大きく関わっているとも考えられるだろう。このようにヤマト王権が東アジアと大きな関係がありそうなことが予測できる。ぜひ、次はヤマト王権についても調べ、より深く学びたいと思った。

その他にも今回と同じような「誕生と滅亡」に着目すると興味深い情報がありそうなものがある。たとえば東アジアとの交流といってもなぜ東アジアであるのか。東アジアの各国について日本より外の国も調査して、考えられると更に深く学べそうな気がする。今回の研究は日本国内、さらに言えば群馬にしか注目していない。東アジアについてももっと詳しく調べることができそうだと考える。

これからはもっと広い視野をもち、特定の地域だけでなく、外国との関わりがあるのであれば、外国についても結びつけながら研究していきたい。そうすれば今回の研究よりももっと詳しい内容を発見することができるかもしれない。日頃から好奇心、疑問を絶やさず、これからも学習に励みたいと思う。

5．参考文献

・群馬県歴史博物館（展示物及び資料等）

・インターネットの情報（写真の引用、情報の引用）

URL
・https://www.city.takasaki.gunma.jp ›